

院政期貴族社会と日記

杉本理

一 貴族社会と日記

今日現存するところの貴族の日記は、研究者の間では古記録とよばれ、先学によつて数多くの研究がなされてきた。しかしながら、既に指摘されているようにそれぞれの日記を時代の文脈のなかに位置付けるという課題が残されている。すなわち、日記が貴族社会において果たした機能やもつ意味が、撰閑期・院政期・鎌倉室町期を通じて同質であったのかといふ課題である。本報告では、院政期の日記である『中右記』を取り上げて考察を加えたい。

三 墓卒伝の背景

『中右記』墓卒伝が、かかる特色をもつて成立してきた背景について考える場合、藤原宗忠の国政観や彼自身の仏教信仰の存在を無視することはできない。宗忠の国政観は、彼を重用した堀河天皇の死後、本格的に展開されてくる院政に対する危機感という形をとつて表現されてくるのである。宗忠は、あくまで撰閑家と天皇による共治、いわゆる撰閑政治を理想的な政治形態と考えていたとみてよい。一方、藤原宗忠の仏教信仰は、法輪寺參詣記事や日野法界寺阿弥陀堂建立に代表されるように、「後世善処」を強く希求していた点に大きな特色をもつてゐるのである。

79 (杉本)

二 墓卒伝の内容と特色

『中右記』墓卒伝は、貴族・官人の死亡時に際し、記主宗忠が故人の官位官職・死亡年令・官歴・出自・批評を記したものである。墓卒伝は、重複した内容もあるものの、皇族撰閑家・宗忠一家・同僚貴族・文人貴族というように類型化できる。

こうした内容をもつ墓卒伝には、二つの特色があるようである。ひとつは、藤原宗忠が故人に對して国政上の評価を試みているものである。評価がなされている貴族・官人は、いずれも院近臣と呼ばれていた人々に限られてくる。第二の特色としては、故人の生前における信仰生活に言及したもの、あるいは「後世善処」が奇瑞などによって確認されたことを記したものという、いわば仏教的色彩を帯びた記述である。そしてかかる墓卒伝の内容は、一連の往生伝と類似した記述内容である点に注目したい。

『中右記』墓卒伝は、内容的にはこうした二つの特色をもつた形で構成されているといえよう。

『中右記』墓卒伝の特色として指摘した二点には、こうした宗忠の国政観や仏教信仰が絡み合う複雑な形の背景があつたものと考えられるのである。しかし、一見矛盾するこの背景は、藤原宗忠の内部では、矛盾なく共存していたものと思われる。これは、当時の貴族の一般的

考へである、聖代觀と末代觀の延長線上に位置付けられるものといえよう。すなわち、藤原宗忠にとつて、堀河の時代が聖代であり、白河の時代が末代であったのであり、従つて末代において「後世善處」を希求することは、矛盾するものでなかつたといえよう。

四 墓卒伝収載の意図

『中右記』墓卒伝は、かかる特色と背景をもつものであるが、ではなぜ、藤原宗忠は墓卒伝を自らの日記に収載したのであろうか。

元来、貴族・官人の墓卒伝は、国史に収載するため編纂されたものである。この墓卒伝の土台となるのが、貴族などの死亡時に提出される墓奏である。国史の編纂が断絶した後も墓奏は続けられていた。藤原実資は、撰閑期の上級貴族であり、彼の日記は、今日『小右記』として伝えられている。実資は、墓奏に基づいて、貴族の死亡の事実のみを記している。藤原宗忠のように、故人の官職・官歴や批評というような詳細な記述はなされていない。このような貴族の死亡をめぐる実資と宗忠の記述姿勢にこそ、撰閑期と院政期の貴族と日記をめぐる周囲の状況の変化を読み取ることができよう。

院政期貴族社会において、中下級貴族は、家業を形成することで、一定の地位を確保しえた。一方、上級貴族は、「御堂流」を除く他の上級貴族は新たな対応を迫られていたのである。宗忠のような傍流はおさらだつたのである。かかる状況の下、上級貴族は公事を行なう上で必要不可欠な先例故実の集積を通じて、一門の地位の確保を図つたと考えられる。先例故実を集積したのが、いまでもなく口伝であり、日記であったといえよう。宗忠は、

当然のことながら「一家」のものが『中右記』を書写することを想定して墓卒伝を収載していたと考えられる。宗忠は、墓卒伝を通じて子孫に彼の国政觀や仏教信仰を「教命」しようと企図したと思われる。なかんずく、彼が、近い立場にあった人物の往生の事実を記している点は、「一門」の範囲を知るうえで興味深いものといえよう。